されば健次ぽッと出の田舍者として口入屋の帳面に黑星をつけられ、まづこれならば御德川向の下男として赤紙づきに差向けられて住み込みしは幸ひ都下の十指に數へらるゝ當世の大紳士岡田重正、二三日の居心地いかにと云ふまでもなき健次が一生懸命の働きに忽ち家內中の評判者となッて同し奉公人中にも可愛がられ、今度の奴は感心だよ、あの新參なか〳〵かせぐぜ、目をかけてやれ、どうやら物になりさうだと先づ朋輩の用に追ひ使はれて主人の耳にも聞ゆる道理、さながら器械の如く駈け廻ッて立働きぬ、あはれこの器械しばし狂はであれかしと、神かけて朝夕の涙に祈る妻のお島は何處に居るやらん、

主人の岡田重正は世に聞えたる當時の利者、まして九箇所の會社銀行を引き受けて綱曳車に駈け廻る身なれば、常に一寸の暇なけれど、祭日と日曜は世塵の外にありて家の內の太平樂、けふも其日とて奥まりたる茶室に我みづから御手前ぶり、障子の外には例の健次が庭箒とッて飛石の隅々までも落葉を掃き寄する體、こゝ一枚の障子を隔てゝ今は上下の分こそあれ互の身に吉凶の裏表、神ならねば知る術もなし、

隔ての障子さらりと開けて顏さし出したる主人の岡田重正は、としごろ五十の上を四歲五歲、でッぷりと肥りし中男の、ちら〳〵鬢に白髮はあれども八字の口髭のみは眞黑に、羽織も上着も下

着も大島紬の常着のまゝ、

「おい汝か、此ごろ來たのは、大分よく働くさうだね」

もとのまゝの健次ならば空嘯いて鼻頭の一笑、全體、うぬが吐く舌の音か金の鳴る音かと持てる庭箒ふりあげて眞向より搔き落すべき筈ながら、かくなりて斯くと心を定めし今日の健次、はッと驚いたる體に振り返ッて、飛石の上に跪きつゝ頭を下げぬ、

「これは旦那樣で御坐いますか、さすが御大家だけに御奉公まうしてから五日目の今日、はじめて御意を得ます、萬事足らぬ勝の者、何卒以後よろしくお願ひ申し上げます、はい」

いひつゝ額越しにジロリと睨みあげたる稻妻の大眼球は、危し〳〵元のまゝの黑田健次、

朝夕すきまもなく會社銀行の俗務に驅られて乾燥無味の經濟界に追ひ廻され、一瞬の眼球の運びに百金の損益を招き舌一枚の間違ひに忽ち千金の利害を及ぼし、年が年中むづかしき事のみに身も心も忙しき境涯は、また時に戲れて馬鹿口をきくの娛樂、また時に下男下女と語ッて無上の快とする習慣、こゝに岡田重正も徒然のまゝ庭箒もてる新參の健次を呼んで一言二言のうち、どこやらに面白げのある男と思はず乘り出して、煙草の煙を吹きながら身上を問ひかけぬ、

「むゝ至體、汝は何處だね生國は、いつどころから東京に來た、いくつだ」
健次なほも庭の飛石に跪いたるまゝ頭を垂れて慇懃の體、
「はい、うまれは大和の者で御坐いますが、片山里の猪や猿と共に朽ち果てんも殘念と存じ、親なし兄弟なし親類緣者なしの一本立が結句の幸ひ、十七の時、何を的ともなく身に一錢の用意もなく、申さば乞丐半分で東海道の膝栗毛、この東京につきまして以來、おのれ分相應に立ン坊でも致しますれば宜かッたものを、なまなか强情骨を突ッ張ッて生學問の下手定規、十餘年の苦學難行なンの功なく」
「むゝ、そいぢやア何だね、書生あがりだな」
「はい、まづ左樣なもンで御坐いますが、翻然と志をあらため書を拋ッて三十男の小僧奉公、何分に此上とも御目かけられまするやう、よし貴樣ア役に立たンから出て行けと仰せられても、幸ひの御當家、お袖に縋ッても一年と二年は」
「しかし、十餘年も苦學したものが俄に下男奉公せずとも宜いぢやアないか」
「なるほど月に二十三十の端月給は、いかやうにもなりませうが、姑息彌縫の策は却ッて一身の不覺卑怯、生涯を打算して最後の不利益と心得ましたから、みづから信じて身を落せば飽くまで

忍んで落つる底まで、なまじひ中有の迷ひは斷にて眼中におかない決心で」
「おもしろい、して最後の目的は何だね」
「願はくば天下の經濟を動かし得らるべき人物の、たとひ一目なりとも御覽を蒙ることあらば」
「なるほど、翻然として實業界に出て見たいンだな」
「千里の駒の尾につく蠅は竟に千里を行くの世諺」

たとへば三間の梢に飛び上らんとして幾度か飛び損ね、果は腰骨したゝか打ッて其まゝ仆るべき痛さも、元來こいつ死骨拋げ出しての强情物、その痛手を忍んでは又もや飛び跳ね、飛び跳ねては又もや顚倒り、さすがの男も金鐵の身ならねば、こゝに氣も絶え息も切れたる折しも、つらゝ〳〵前事の愚を顧みて心機一轉、翻然として悟ッたる今よりは、いざや十餘年を夢と見て元のいろはに立戻り、三間の梢に足るべき三間半の梯子を求めて、一段々々悠々と上り行かん決心に、おつる底まで身を落して當世の豪商岡田の家に住み込んだる健次の面つき、もしや知る人の眼より見れば猛獸しばし飢ゑて檻に飼はるゝが如し、
夜更け人定まッて物置小屋に隣れる疊三枚一室のうち、これぞ今我城廓として、健次たゞ獨り

枕頭の二分心ランプに荒土の喰み出でたる屋根裏を見ながら、あけて人にも云はれず顔色にも出せぬ心の一物、繰り返しては我みづから問ひ、繰り返しては我みづから答へ、自問自答の苦しさを誰かは知る、幸ひ今日は主人に逢うたり、逢うて彼なンとか我を見たらん、我は彼を一目に與みし易しと見たる眼の、そも〳〵中りしや中らざりしや、しばしこのまゝ謹直の下男となッて一月二月を過しなば、忽ち吉凶の效果あらはるゝと共に猿臂を伸ばして引ッ掴み、掴み上の活動はソロ〳〵元の黒田健次、それも一年の後、せめて一年の後、あはれ一年の後に身を立てずンば我もはや世に甲斐なし、大俗に跳ね出されたる身一個を引き摺ッて故郷の山中に閉ぢ籠り、落つる木の葉に屍を埋めんのみ、とはいふものゝ思へば哀れなり妻のお島、さても其後いづこ如何なる浮世に流れて何を世渡りに憂身を窶すらん、

おもはず手は胴卷に觸れてお島が遺書を取出しつゝこれほどの男こゝに遊冶郎が花里の艶文殼を繰り返すが如く、悲しげに樂しげに苦しげに哀れげに果は其まゝ顔を押し當てゝ、今宵一夜を何として明さん、

門外の事は良人の口より家内の事は妻の口より、互に逢うて語る言葉に齟齬なければ、佛神の力

をからずとも家内安全延命息災、これに上こす人間の幸福はあるまじ、

されば岡田の一家も、主人は世に出でて寸暇なき繁忙の身、妻は大家を控へて朝夕のつとめ、しかも夫婦もろとも五十の阪に上り四十の上を越して、過ぎし春の花は夢となり今は萬事を秋の實に、言葉の端までも更に浮きたる色はなし、

「近ごろ來た、あの下男ね、ありやア和女の眼でどうだい、間に合ふかね」

「あれで御坐いますか、あの者の事については、妾から申し上げようと思うて居たところで、口入屋などから參ッたものには、なか〳〵めづらしい感心な男で御坐いますよ、何をさせても仕損じはなし、用事を言ひ付けると返辭の終るか終らないうちに直ぐ起ッて働きますし、まだ分らない事は最初に幾度も聞き直して、そして無闇に世辭をいふでもなく、また人が見ないからッて骨を惜しむでもなく、まづ近來の拾ひ者で御坐いますよ、第一良人、あれの朋輩どもが感心いたして居りますもの」

黒田健次

「むゝ、さうだらう」

「さうだらうッて良人、御存じなの」

「あゝよく知ッてるよ、おもしろい奴だと思ッてるのさ、それも山田の田舍者ならだが、この東

京で十餘年も書生した奴だから猶更ら珍らしい」

「おや〳〵、あれは十年も書生した者で御坐いますの」

「さうさ、ところで、あゝして庭掃除や風呂焚をさせて置くのも可哀さうだ、どうか工夫して一番こゝろみに使ッて見たいやうな氣がするのよ、しかし人間は半月や一月で本性の分るものでないから、油斷も出來ないさ」

「そいぢやア良人、當分のうち、どッかの社の小使にでも」

「いや〳〵不可ない、乃公は一切、自分の關係して居る會社に自分の口から人を入れない決心だから、そこで、まづ、あの足を洗ッてやるのよ、下駄か雪駄を履くやうにしてやるのさ、庭で使はずに席上で使ひ道はないかね、玄關にでも置いてやらうか」

「玄關より、いッそ、どうで御坐います、臺所の取締に」

「むゝしかし、根が書生あがりと來て居るから、いくら働いても穴違ひだよ、だから當分まづ家の外使にしておけ、手紙を持たせてやッたり、其外いろンな外廻りの小使にさ」

「なるほど、それが宜う御坐いませう、あの分なら物の間違ひはなし時間の後れる氣遣ひはなしそして第一に理非が早う御坐いませうからね」

「さうだ、彼奴ずゐぶン小むづかしい事でも、やッて來る面つきだぜ、しかし氣を許すと不可ないよ、全體が馬鹿正直でないから」

うまれながらの善人よりも惡を知ッて後の善人は尊きの道理、田舍ぽッと出の正直一片は都の風に吹かれて前途に狂ふの恐れあれど、さン〳〵狂うて浮世の酸いも甘いも知りぬいたる果に我から悟りし正直は却ッて物堅き今の健次、岡田の下男となッて以來なほさら其身を謹み其口を慎みつゝ、例の駄法螺駄洒落は夢にも出さず、日夜の骨を粉にして働く風情さながら電氣作用の器械に似たり、されどこれまでの健次を知るものなければ、主も朋輩も眼前に見る質朴の健次、あいつ元來なにを娯樂に生きて來たぞと疑はれぬ、

「おい健公めづらしいな、どうしたい、ぼンやりして、身體でも惡いのかね」

いひつゝ入り來りしは岡田の抱へ車夫、今日は主人が不意の横濱行に思はぬ一日の骨まうけ、しかも聊か酒氣を帶びての談話對手に、どッと身を横たへ腹這ひながらの煙草を吹けば、えゝ煩さい、牛馬に用はないと叫ぶべき健次わざと滿面の笑を浮べて、

「やア、たいそう御機嫌ですな、はゝゝゝ」

當世五人男

「なアに、あンまり御機嫌の體でもねェが、鬱いだッて金が出來る譯ぢやアなしよ、やけ半分の浮世だアね、時に何か面黑い談話でもしてくンな、おめェは大した學者だと聞いてるぜ」

「學者、あの私がですか、誰が、そンな事を申しましたな」

「かくすない、この野郎、知ッてるぞ、書生あがりだらう、しかし、それにしちやア感心なもンだ、全體また何うして斯ンな業をするンだい、いはれ因緣ずゐぶン深かりさうだな」

「あはゝゝゝ深いも淺いも見た通りの木偶人で、いはれ因緣なンか少しもありませンよ、なるほど書生あがりに相違なしの遺り損ひ、ホーカイ節に落ちなかッたのが先づ出來でせうよ、時に私の書生であッた事を、どうして誰にお聞きなすつたね」

「主人にさ、親玉によ」

「旦那樣にですか」

「あの新參者は書生だッたといふ事だか、貴樣、よく調べてみろと命令ッたのさ。おめェの身の上を」

「なるほど、旦那樣が、ヘエ、ところが別段これといふ仔細も何にも無いが眞實ですよ、かりにも十餘年の書生した身に仔細がありやア、まさか斯ンな奉公もいたしますまいよ」

「おッと待ちな、仔細ありやアこそ斯ンな奉公をするのだらう、かくさずに言ひねェな、ぶちまけたッて爲の惡い事を告口する人足ぢやアねェ、つまり親玉が、おめェに何か見込があるンだらうよ、吉だぜ吉兆だぜ」

「吉か凶か知りませンが學問が嫌さに斯うなッた外、全く何の仔細もないんです」

「いはねェな」

「いはないぢやアない、いふことが無いアです」

「さうか、そいぢやアまづ其通りとして、時に先生、おめェさん何時まで當家に斯うして居る心算だ」

「お暇の出るまで、役に立たないから出て行ゆけといはれるまで辛抱して、せめて金の五六十圓も拵へる考へで」

黑田健次

「ぢやア何だね、給金しこための決心で」

「まづ、さやうで」

「その給金をためてどうするのだ」

「百圓近くにもなりましたら、國へ歸ッて鷄でも飼ッて見ようかと思ひます、どうせ意氣地なし

の私なンざア、東京に居ッたッて無效ですからなア、萬事あきらめましたよ、へエ」

「いやに吝臭い料簡を出すねエ、その面つきたア大分ちがッてるぜ」

「この面で御酒は一滴も不可ません、あなた酒鹽にでも醉ひますもの、から外見倒しで人一倍に損をしますよ、損たッて別に大した損でも御坐いませんが、とかく氣が小さいと自分でも折々、心付きながら、やッぱり生來で、はゝゝゝゝ」

岡田重正が今日の地位る得たるもの、半ば內助の力にありと持て囃さるゝ其妻女は、ことし四十の上を六つ七つ何處に際間もなき內紳士の夫人、あれが左褄とッた昔の花の餘波かと思へば、また何とやら打解けて野暮ならぬだけ、萬事の捌きも圓く家內一切を引締めて、天晴れ御大將の陣營をぞ守りける、一室のうちより手を鳴らして侍婢を呼びつゝ、あの近ごろ來た下男すぐ此處へとの急用、何事ならんと健次まかり出でて慇懃に兩手をつけば、妻女しづかに振り返りて言葉やさしう、

「たいそう汝は評判が宜いよ、よく働くッてね、なほ此上とも氣をつけて勤めておくれよ、此方にも眼はあるからね」

「はい有難う御坐います、いやもう、萬事かけだしの無器用者で御覽の通り何のお役にも立ちませンが、たゞ御奉公大事といふ事だけは」

「それさ、それが何よりだよ、時に汝ね、いつまで下にばかり働いて貰ッても氣の毒だから、ちと外の用をして貰ひたいの」

「へエ、外の御用たア、全體いかゞな事で、あまり荷が勝ちましては脚下が覺束なう御坐いますから、今しばらく此まゝ、これが私の分相應かと心得ます、はい」

「なアに別段むづかしい事でもないのよ、たゞ汝が今の用を止してね、そして、あの手紙や何かの使ひ歩きに、とかく、これまでの男は字が讀めないから、をり〳〵間違ひなンかあッて困るのよ」

「はゝア小使で御坐いますか、いやそれならば勤まりませう、しかし朝から夜まで引續いて御用のある筈も御坐いますまいから、その間には何をいたしませう」

黑田健次

「それ一役で當分よろしいからね、際があッたら自分の好いた事でもするさ、時に汝は何が好事だエ」

「はゝゝゝゝ只今の身分で、ものゝ好き嫌ひなンか決して有らう筈は御坐いません、たゞ運を天

に委して三度の御飯を無事にいたゞくのみの事、まづこれを以て人生の快といたして居ります、心あッて見れば路傍の小石も私に對うて笑を含むが如く面白をかしう自分から氣を勇めて暮す心算で、一切の嫌ひが御坐いませンから一切の好きもない道理、そこで」

「そこで、どうなるンだね」

「いや御免くださいまし、奥様に向うて失禮な、つい、おもはず、ヘエ何分よろしく願ひます」

「あら、ごまかしたよ、かまはないから面白い談話を聞かしておくれなね、なンだか汝には世間尋常を外れた呵しい物語がありさうだよ、これまで細君を持ッた事はないかね、なアに細君にかぎらずさ、懺悔話をおしよ、きッと何か、あッたに、違ひなからう、ある顔つきだよ、ほゝゝゝゝ」

「御戯談を、夫人この面で御坐いますもの」

「いゝえ、その顔が却ッてある顔だよ、妾には、ちやアンと見えるの」

「この面が却ッて、却ッてとは聊か恐れ入りましたな、はゝゝゝゝゝ」

「だッて汝、きけば十餘年も書生した人がさ、俄に醜へッて下男奉行するには、何が其間に、その何かが女だらうと察しるのさ、どうだい、さうだらうね」

「はゝゝゝゝゝさう仰しやれば、づう〳〵しく申し上げますと、いはれない事もない身で御坐いますが、さて申し上げたところで溝板の上におッこちた木葉一枚の音もいたしかねるほどの儀で、はゝゝゝゝゝいづれ後日に、どうか今日は此のまゝ」

「ぢやア、また聞きませう、そのかはり旦那と二人ならンだ前で聞くよ、いゝかえ」

「よろしう御坐います、つれ〴〵の御なぐさみに戀の端の浮世の裏、おもてむき申し上げて御一笑を願ひませう」

黒田健次

金ならば十千萬兩の還り取り、家ならば天下に五本の指を折らるゝ大家の存亡、會社ならば人心の顚倒る大騒動、もし一個人ならば生死の境目に關するほどの大事を抱へて天晴この腕を試さんと思ひし健次も、いたづらに變物と笑はれ狂者と謗られ可惜ら神算鬼謀また駄法螺となッて玆に十餘年の今は、あはれ何事ぞや風呂の水汲みと庭掃除の勤勉とに腕を試されて、あの男どうやら間に合ひさうだと見込まれてからが、やう〳〵一家の私用に手書を携へての走り使ひ、しかも役附の第一番に命ぜられたる急用は、岡田の妻女が明日の芝居見物に親類七軒の女子供を驅り催す俄の用意、ついでに茶屋を談じて辨當の好みまで、

されど今の健次は唯これ命に従うて、主の御用といへば横町の牝犬にも頓首再拜せんばかりの質朴柔順なる健次、その一書を大切に懐中へ捻ぢ込むや否、七軒の回狀くるりと廻ツて二里にも餘るべき道程を、かくなりては斯くの仕合はせ凡俗に對する働きぶり、およそ一時間餘に恐く返答とッて歸らんものと、かッては鐵石よりも重き尻を輕々とひつからげたる素足の韋駄天で、額の汗を拭きながら生來の大眼球わきめもふらで駈け出す風情、墮落書生の喰ひ逃げか巾着切を追ッかくる勢ひか但しは友達の急病に下宿屋より飛び出したる醫者さわぎか、いづれにしても尋常ならぬ怪しの風體に、往來の人も思はず足を止め眼を欹て〻見返る其中に、もしやお島のあるならば何とかするらん、いかに狂うて泣くやらん、

きのふまでは米櫃に蜘蛛の巣を張るとも驚かず、破れ疊の上に大の字となッて天井の節穴を數へながら、ます〳〵蔓延る貧乏神の澁團扇に枕頭をあふがれ、債鬼四面に關を擧ぐるの眞只中を、とかく浮世は斯うしたものよ、生命に別條ないわいなと鼻唄うたうて平然悠々のンこの酒アたり

し横着物が、白粉あがりの半婆を主と崇め奉ッて假名まじりの下手糞手紙、しかも明日の芝居に親類の女原を騙り催すために、大の男が向脛に風を切ッて砂煙の中を一文字に馳け行く今日の健次、そもや何の業なりける、いかなる心の一轉ぞ、さては又どれほどの野心あッての苦節ぞや、

鐵道馬車を駈け拔け綱曳きの人車を追ひ越して、一生懸命に馳せ行く途端、南無三寶、あはれ

小石に躓いて伏し顚び、人に指さし笑はるゝのみか、何心なく自己が脚下を見れば黑血ながれて

生爪を剝がしぬ、さすがの健次、つら〳〵打見て、おもはず兩眼に涙を浮べぬ、たとひ片腕きり

落さるゝとも斬り落さるべき仔細あらば冷笑一番、さらに蚊に螫されたほどの澁面も作らぬ我な

がら、これにつけても何處に何をして暮すやら痛はしの島よ、せめては夢になりと通ぜよかし、

我も今は斯くならんと、

黑田健次

風呂の水汲さては朝夕の庭掃除に骨を碎いて惜しきものと見拔かれ、やう〳〵一段の地位を進められて岡田夫婦が手廻りの小使となり、また小使の役目さらに脫落なく身を拋ッて晝夜の勤勉およそ一月の後には、根が書生あがりの一時と思ひの外あの働きが當坐の酒落にてなるべき業か、

なるほど何をさせても一生懸命の奴、よく〳〵本心からの忠實しき男ぞと、首尾よく健次こゝに

金看板を掲げぬ、

されどこの金看板は元來の健次に取ッて鼻糞の丸藥とも思はず、まづ悟ッて後の我がためには抑

もの序幕、いざや、これより演ずる舞臺の木藝御覽なりませと、いよ〳〵內外に向うて淺黃頭巾

を面深に被りつゝ、日夜半身低頭の間に得ならぬ一種の愛敬と世辭を浮べ、時に人を笑はせ人に笑はれながらも、踏まれた草に花さく春の野邊を待つ心地して、むら〳〵と湧き出づる方寸の策略を其夜々々の夢に包みぬ、

けふの風に向うて眼の中に大道の塵埃を打ち込まれた、鏡があらばと奥の小間使に借りたる懐中鏡を二分心のランプの下に照らして夜更け人定まりし後、じッと眼を定めて我みづから我を見れば、わづかこゝ二月ばかりがほどに顔色どうやら青ざめて、いつしか頬の肉さへ痩せたる心地、さもさうづ、さもありなん、鐵石の身ならねば此ごろの乃公、あはれ英雄も下司奉行の栄葉に腹を叩くの今は何とせん、人すゝまざるにあらず實に馬すゝまざるが故なり、

すゝまざる馬これを急に鞭うツては却ツて痩せなん荒れなん、誰か知る暫しこゝに秣を飼うて靜に鬣を撫で尾坪を整へつゝ、ことしの秋の空たかく嘶く聲の肥えたるころ、いざや一鞭くれて浮世の眞只中に歸り新參の曉は、いかに面白からん、いかに快からん、おのれやれ、さるにてもお島か殘せし書の端に、せめて一年、あはれ一年、もし一年を過して後たとひ元のまゝなる我なりとも、十年の榮華に代へて呼び戻せよとは、まことに我を勵ます天使の命令、されば我またこの一年間を生涯と見て、空しく過さば生きて甲斐なき屍の健次、ぬかるな、油斷大敵と自己

が胸間を叩いて大眼球ぐる〳〵と剝き出しぬ、

健次が岡田夫婦の手許の小使となりし時、第一番に命ぜられたるは妻女が芝居見物の誘引書、それさへ石に躓いて生爪を剝がすほどに勤めたれば、いよ〳〵愛せられて益々いそがしき身となりし三度目の日曜に、はじめて、主人の重正より命ぜられたる一封の書狀、これを根岸に住める倉橋幸藏といふ人の許へ持參して返書を持ち歸れといはれし時は、さすがの健次あッと驚いて殆ど死毒を舐めたる如き苦しの息に、

「かしこまりました」

人もあるべく目もあるべきに、倉橋幸藏、しかも彼奴が在宿すべき日曜日、あはれ何とせん、由來十年の舊友たる我を三十六錢の日給に辱かしめて更に氣の毒とも思はざりし奴、また職を辭して後わざわざ禮を厚うし言葉を卑うして賴めどと縋れども口說けども、穴のある錢一文も貸すこと無用、君の如きものを朋友とするは名譽に關するとまで吐したる奴、おのれ畜生ふざけたるかな、他日この健次が二頭立の馬車を玄關に乘り掛けて微塵に碎きくれんと心に誓ひし其倉橋幸藏が許へ、何事ぞや宿志いまだ成らずとはいへ一家の私用に追ひ使はるゝ走卒の奴となッて書狀持

參の役目、それも彼奴が在宿すべき日曜日とは重ね〳〵の無念なり心外なり、たゞ願はくは玄關のみに事の濟めかしと祈れども、取次の小女郎まで我この面を見知れる辛さ何とせん、かつまた文通の往來あるからは本人と本人との往來もあるべき筈、幸ひにして今日まで彼奴の訪ひ來し事はなけれど、いつ何時に來ッて我と面を合はすやらん、面を合はせば忽ち現るゝ黑田健次が由來の本色、さらば岡田の家に斯くまで骨を碎きし甲斐もなく、卽坐に萬事めちや〳〵の破滅、あはれ南無三寶、

健次おのが部屋に大息ついて眉を顰めしが、さらに心を醒して何をか感じけん、忽然むく〳〵と起き上ッて例の尻ひッからげたるまゝ、家を飛び出して根岸の方へ一文字、

されど倉橋幸藏といふ門札の四字を見し時、はおもはず一種の感に打たれて胸ぎッくり、勇氣一番ままよと飛び込めばまた何たる事ぞ、主人の幸藏め今しも人車を命じて立出でんとするのみか、いづれも我を見知れる書生小女郎の輩まで玄關へ送り出せし眞最中

健次もはや更に動せず、倉橋が乘れる車の脇に立寄ッて中腰となり、うや〳〵しげの兩手に奉る一封の書狀、

「これは御當家の旦那樣で御坐いますか、私は岡田の召使、この御返事いたゞいて歸れと申し付

けられました、はい、御出がけに甚だ恐れ入りますが、どうか御返書を、はい、はい」

倉橋幸藏おもはず一驚を喫して車より飛び降りながら、兩眼の涙はら〳〵健次の手を執ッて暫し無言の後、

「黑田、黑田」

心の野心いよ〳〵勃々として天空を走れども、身はこゝに人の奴隸となッて地上を駈け廻りつゝ、せめて半年の屈を忍ぶは正しく前途の半年を伸びんがため、一封の書狀を携へて飛び込んだる家は由來十年の舊友、しかも散々に辱かしめられたる怨恨の火焰いまだ消えざる倉橋幸藏めが今しも車を命じて立出でんとする轅の前に殆ど土上坐の體、恐る〳〵慇懃に差出したる健次が心中、いかにあるべきぞ、わけて人なみ〳〵に飛び出でたる豪放不羈の男一貫、

黑田健次

さすがの倉橋おもはず車より飛び降りて、健次の横顏じッと見詰めながら、黑田、黑田と二聲三聲、聲を震はして呼べども健次とぼけて更に知らざる體、ます〳〵恭體こゝに謙遜ッて頭を自己が膝頭に叩きながら、

「はい、えゝ黑田は私の苗字で御坐いますが、旦那樣がた御存じの筈もなし、これは何か人間

違ひで在らッしやいませう、私は近ごろ慶庵から參つた岡田の召使で、はい、御戯言を仰しやらずに、どうか御返事を」

倉橋幸藏さてはと感歎の膝を打ちつゝ、まづ玄關へ送り出せし書生下女を追ひ退け、車夫までも彼方に追ひ遣りて後、しづかに帽を取ッて言葉を潜めながら、

「黒田、もはや多言を要せずだ、きくに及ばず君の決心は分ッた、あゝ今にして始めて黒田の黒田たる所以を諒解したね、僕などの敢て企て及ぶところにあらずだ、實際その覺悟なくンば無效だ、その行なくンば元來の君にあらずだ、しかし僕が君に盡した過般來の本心いまだ打明ける の機でないから、それは先づ其事として、願はくは猶よく岡田の下に屈して他日の大に伸びんことを祈るのみだ、僕また岡田に逢ッても、君のこと、さらに口へは出さないから」

いひつゝ手を執ッて下げたる頭を上げんとすれば、健次いよ〳〵腰を折ッて恐縮に堪へざる如く、

「いや恐れ入ります、これは恐れいります、どうか書狀の御返事を」

「手紙の返事は今すぐ書くから、まア宜いぢやアないか、さう恍けないでも、あンまり態とらしいから却ッて呵しいよ、おい黒田、なンとか言ッてくれ、どうだ倉橋この風姿が貴樣の眼に何と

見える、隨分おつだらう、ついでに美味いものを喰はせろ、天を衝くの英雄しばらく路傍の草間に睡る位の氣焰は君に於て宜しくあるべき筈だ、人生の第一義と第二義、浮世の裏と表、白もあり赤もあり時に大なり小なりとは十年以來の君が口より聞くところだが、ねエ黒田」

「これは旦那樣、いろンな事を仰しやいますが、私にはさッぱり理が分りませン、ところで、あらためて伺ひますが、倉橋幸藏樣と仰しやるのは全く貴方樣で御坐いませうか、もし御門違ひかと存じまして」

倉橋も今は其意を得て容を改めながら、

「むゝ倉橋幸藏は乃公だよ、ぢやア汝きのどくだが、暫く其所に待ッて居てくれ、今すぐ返書を認めるから」

「はい、かしこまりました」

奥より硯と卷紙を取寄せながら、玄關に立ッたるまゝ返書を認め、それと渡せば健次なほさら慇懃に受取ッて直ちに馳せ歸るかと思ひの外、どうやら俄に歸りもせざる樣子、唯うぢ〳〵として獅子ッ鼻を蠢めかす風情に、倉橋おもはず眉を顰めて笑を含みながら、

「何か忘れものでもしたのかね、をかしい樣子だ」

「はゝゝゝゝ別に忘れ物は致しませんが、へゝゝゝゝ先刻から旦那様の吹かして在らッしやる御莨は全體なンと申す煙草で御坐います、たいそう宜い馨りが」

「はゝゝゝゝこれか、これはマニラの葉巻だが、汝へ、すきかね」

「わたくし大好物、どうか一二本いたゞけませんかな」

倉橋ぷッと吹き出してポケットにあるかぎりの葉巻を掴み出して渡せば、健次しづかに受取りて其中の一本ぱッと薄紫の香煙を吹きながら、尻ひッからげたるまゝ悠々と立去る後影、なるほど落ちても枯れても健次は健次なりける、

岡田夫婦の面前に呼び出されて健次つくねンと坐したるまゝ、何の御用と伺へば主人の重正まづ笑を含んで乗り出しぬ、

「今日はね、別段これといふ用もないから、汝の身上談話を聞かうと思ふのさ、それも十餘年來書生した下宿屋住居の境遇よりやア過日、汝が妻女に言ッた浮世の裏の端とやら、そいつを表向に聞きたいね」

いひつゝハ、と笑へば妻女も口を添へて促しつゝ、

「さア言ッてお聞かせな、嘸おもしろい事があらうに、ねエ」

さすがの健次どうやら進退こゝに谷りし體、一文字の太き眉を顰め大眼球を閉ぢて暫し無言に差俯きしが、やがて振り上げたる面上に得ならぬ一種の笑を含みぬ、

「こりやア困りましたな、せめて昔の花衣まだこの身につけて、いさや物語らんといふ坐でも組む位の勢ひが御坐いますなら、少々は乗氣にもなりますが、如何せん、惘然かくのざまと成れの果の今日、はゝゝゝゝゝ紙屑買が地藏堂の縁に腰うちかけて親の代の榮華を誇ると一般で、はゝゝゝゝゝ笑ひ事にもなりませンから」

主人の重正いよ〳〵笑うて、

「をかしい〳〵、面白いぞ、その調子で一つ話して聞かせろ、なアに外に誰も聞くものはないから、遠慮なしに、おッぴろげて」

「ぢやア御免を蒙ッて、申し上げるほどの事でも御坐いませンが、却ッて時の御一興に、しかし何だか妙な工合で、はゝゝゝゝ」

「はやく聞かせろ、笑はずに」

「我みづから我を顧みて笑はずに居られませンほどのつまらない戀の片端、これでも私に一人

の女、まづこゝに女が御坐いまして、その女たるやです、赤繩あやまり結ぶ惡因緣で、私には十二分に過ぎた女、容貌氣質は大紳士の令夫人といはれても更に後れぬ女が、男もあらうに私の如きものゝ妻になるとは殆ど月下氷人の結び損ひで御坐いませうな、はゝゝゝ」

「なるほど、よほど美人だッたと見えるな、しかし女の評判記は其くらゐにして置いて、そも汝に馴れそめた最初は」

「その女です、ある料理屋の女中をして居りました時分、私が瓦落々々書生の眞最中、ふいと一酌の對手として、さす盃の一つ二つが緣の端、つい妙な工合に呵しい鹽梅が混じて、はゝゝゝゝ此ところは先づ淺黃幕、二幕目には其女ふら〳〵と私の下宿屋へ訪うて來ましたね、いはゆる私の下宿屋が其女の伯父に當るもので、その伯父なるもの先づ私を男と見込みましたが卽ち彼の不幸、しかし其不幸を七年間じッと堪へて夢にも怨み顏を見せなかッたのが、却ッて今日この境遇に私の安ンずるところで、はゝゝゝゝ」

面白き奴、呵しき男、十年間も書生した割には珍らしく骨を惜しまず、さりとて馬鹿正直でもなく怜悧の尻拔でもなく、どこやらに丸く野暮ならぬ妙あッて、また理窟をいはせれば飽くまで並

べて言ひたげの口元に、獅子ッ鼻を蠢めかして人に恐れぬ面魂ほのかに、此方にさへ油斷なくば先づ八方に間に合ひの拾ひ者とは、岡田夫婦が寢物語に上りし今の健次が批評なりける、

一夜、主人の重正ふいと立出づる先は十五町以內とやら、車でもあるまじ、食後の運動かた〳〵まだ宵ながら闇の脚下てらす提灯の役は健次、主從あゆみながらの物語、

「おい、も少し早く歩いても宜いから構はず先へ、時に汝は全體なッの目的だね、乃公の家へは不意に來たのか、但しは望ンで來たのか」

「はい、實は御盛名を慕うて、私の分際相應、出來るだけの運動いたして、やッとのこと御厄介になるまでの」

「むゝ、さうか、ぢやアいつまで小使なンかして居る心算ではあるまい、何か其間に」

「はい、山海の珍味たちまち御手の鳴るに從うて集る中に、かくの鰯一尾、もし御膳の端にも上るやうな事が出來ました場合には、鹽燒になりと將また叩いて丸めて汁の實に遊ばすとも、鰯だけの味ひを御存分に」

黑田健次

「おもしろい、その決心が奇だ、もし其うち何か考へてやらう、しかし自分の所望と得意の藝は那邊にあるね、まづ、そいつを聞かう」

「人事十中の八九は自由ならず殆ど天にまかせますが、さて得意、はゝゝゝゝゝこれでも一番やツて退けたいと思ひまするは、およそ通常人の避けて難しとするところ、大きく文章めいて申し上ぐれば盤根錯節の間に」

「利刀を用ひて見たいと言ふのだね」

「根が錆びた露店買の小刀一挺、たゞ磨いで〳〵地金の減るまで磨ぎ拔いたところで、ちよいと一切」

「よし〳〵、わかッた、承知した、近々のうち汝の切味を試して見よう、しかし何を切らさうかな、はゝゝゝゝゝ」

「まづ柔かいところより願ひあげませう、いざとならば豆腐ぐらゐが分相應かも知れませンて」

「その勢ひぢやア、まさか然うでもなからう、時に今夜、乃公の行くところを妻女はじめ一家の者に知らせちやア不可ンよ、宜いか」

「口をついて馬鹿聲は出ますが、物と事に依ッて祕密を守るの義は心得て居ります、はい、御安心あそばして、いづれへなりと」

「むゝそれもよし、だが汝のやうな男に弱點を知らせるのは危險だね、少々の金樽では跳ね返り

さうだから、はゝゝゝゝゝ」

「いや、跳ね返ッても用のない場所では案外おとなしい奴で御坐います、はゝゝゝゝゝ」

出るにも入るにも綱曳あと押しの人車を走らせて、風塵の中を韋駄天おそしと焦る岡田重正が、時代めいたる提灯の火に脚下を照らして悠々と歩みながらの落着點、そもや何處と健次こゝろに思案の臍を曲めつゝ、とある横町の小路に入りて、こゝぞといはるゝ門口を見れば、黑板塀に細格子の妾宅構へ、なるほど、なるほど、人知れぬ穴なくては叶はぬ當世紳士、さるにても新參の我に、この弱點を知らする主人の心いかに、こいつ面白い中に聊か變だわい」

「おい此家だからね、しかし、なほ汝に用があるかも知れないから、ちよいと暫く待ッて居な、宜いかね」

いひつゝ重正づいと入りて障子引き開けつゝ無言に奥へ打通りし體、あとには健次あはれや下駄箱と並んで上り口に腰うちかけながら、きけば奥の室にて幽に媚び笑ふ女の聲、あゝすさまじきものは下司奉公、何事ぞや天下の奇傑たる我こゝに尻ひツからげたるまゝの土下座も同然、しかも手に取る如き浮世の春を餘所に見て、飼猫にさへ内兜を見透かさるゝ今の境遇、

黑田健次

をりしも聞ゆるは主人の重正、はゝと大聲あげて笑ひながら、こンど乃公の家へ面白い奴を抱へたぜ、幸ひ今夜つれて來たから、和女ちよいと會ッて見ろ、面貌からして妙だよと、またもや大聲に笑へば聽て女の聲として、おやさうですか、こゝへ上げるも何ですから、緣端へ廻して、幾何か遣りませう」

健次おもはず太き一文字の眉を動かして、畜生め、面貌からして妙だとは眼前ふざけた言分、その言葉尻に乘ッて貴女に等しき分際の口より、こゝへ上げるも何ですからとは何たることぞ、庭口へ廻して幾何か遣りませうに至ッては殆ど我を乞丐非人の待遇、いよ〳〵以て怪しかる奴、さても奇怪千萬の言を吐す女かな、

さらばよし、我から逆寄せに庭口へ立廻ッて、五十男の半白でれ〳〵と水飴に似たる風情、かつは阿魔の眉目じやら〳〵と金欲しさうなる白粉面を見ながら、一番こゝろみに此方から遊ンでくれべい、いや面白いぞ、面白いぞ、とかく世上は敵にかまはず心の持ち次第、總雪隱の陰に積んだる塵埃溜を玉の塚とも心得て、それよ〳〵、

風呂の水汲み朝夕の庭掃除、一家私用の手紙を持ッて駈け廻る小使役もとより、心機一轉の我み

づから期せし覺悟とはいへ、もはや人生この上の落魄はあるまじと思ひしに、あはれ何事ぞと、人知れぬ妾宅がよひの提灯持となッて、しかも障子を隔てゝ幽に奥の癡話狂態を聞きながら、あがり口の下駄箱と竝んで惘然こゝに供待の面相、いかに器量の下りしやらん、鏡あらば我みづから我をうつして見たし、

黑田健次

さるにても此家の妾め、庭口に呼び廻して幾何か遣りませうと吐す前に、おのれが手に遲ばずとものこと、まづ下女に命じて一碗の茶ぐらゐ我に汲み出す氣もつかざるや、まだ分別さかりを過ぎたる五十男も戀には前後忘却、つい三十分よし一時間まゝよと惡戲ちらして時刻のうつるを覺えず、夜の十二時までも天下の奇傑こゝに下駄箱と相住居の奇怪あらば何としてくれん、いッそのこと今夜は此家にと横になられた上、曉までも我あるを忘れられては叶はじと、うしろの障子紙に響くばかりの咳拂ひ二つ三つ、さてはと心づいてや、奥より疊ざはりの優しき跫音、しめた、もはや主人が立歸る先觸か、まづ當坐の欠伸止めに茶菓子の盆か、例の庭口に呼び廻して幾何か呉れうと吐すためか、畜生め、えへン、えへン、

をりしも障子しづかに引き開けて、半面半身を現したる女、しづかに片手をついて茶を差出す風情の尋常さ、奥の方より細目にあきし襖越しの燈火もれて幽ながらも色白の美人めいたり、此家

の本尊か、いや本尊にしては供待の我に對して禮儀過ぎたり、さらば下女にしては萬端やさし過ぎて聊か變なりと、健次おもはず腰ふりむけて差出す茶を取らんとすれば、女たちまち驚いて、

「おやッ」

おやと驚く聲に健次も驚きながら、よく〳〵眼を定めて見れば南無三寶、お島なりける、あはれ島なりける、お島ぢや、お島ぢや、

今は戀にあらず情にあらず意地でもなく、たゞ生命あるかぎりは夢にも忘れ難く現にも離れがたく、あはれ　總身を責められて堪へがたきまでの妻のお島、いづこの端いかなる浮世の果を何を涙の種として暮すやらんと思ひしに、おもひきや人の奴となり加之も妾宅がよひの提灯持となッて下駄箱の片隅に供待の今こゝで逢はんとは、あはれお島またこの妾宅の下女か厄介か、いづれにしても氣兼勝なる日蔭の風情、さても夫婦うち揃うて落ちも落ちたり思はぬ場所に逢ひも逢ひたりける、

「良人や、もし良人、良人まア」

餘所にや漏れん奥へや聞えんと、聲を潜めて泣きの涙に呼びかくれば、健次たゞ兩腕を組んだる

まゝに眼を閉ぢて大息ほッと吐きぬ、

「我慢しろ、默れッてば、聞えるから默れよ」

「だッて良人まア、その、その風俗は」

「えゝ見るな、見てくれるな、今しばしの間だ、あかの他人だと思ッてあきらめろ、我慢しろ」

「そりやア、その事は、ようッく分ッて居ますがね、良人まア、なンだッて、いかに身を落すッても、あンまり」

「こゝこの眼を見ろ、乃公の眼を見ろ、これが證據だ、物が言はれるかい、我慢しろよ、こゝ一月か二月の間だから」

「あい」

「わかッたか」

「あい」

黒田健次

「身を大切にしろ、よ、この樣子ぢやア互に顏見るこたア何時でも出來さうだからよ」

「あい」

をりしも奥より主人の重正いさ立歸る風情に、お島はッと驚いて涙を袖に飛び退けば、健次も立

上ツて俄に袂よりマツチを取出しつゝ、慌てゝ提灯に火を點す手元、そもやこの手は一掴みに萬金なンの苦なしと思ひしものが、今の他人の脚下照らすがために幾度か摺り損ねて焦る體を、お島なほさら悲しく辛く怨めしく臺所へ走せ入ツて別に點火たる蠟燭しづかに差出せば、いや恐れ入りました、これは〳〵、はい憚りさまと會釋する良人の心、させる妻が心の切なさ、おくれ出せし此家の妾女は年ごろ二十三四の藝妓あがり、重正はゝと笑ひながらに振り返りて、

「この男だよ、先刻に談したのは、何とか挨拶してやれ」

「おやさう、おまへさん大變おもしろい人だツてね、ちと遊びにおいでよ」

健次うや〳〵しく腰をかゞめて、

「はい、ありがたう御坐います、何分よろしく願ひます」

お島おもはず眼を閉ぢ耳を塞いで、神さま佛さま、早く此苦を脱してたべ」

あいつ面白い奴といふ言葉の裡には、毒がなくて自由になるの意、底に針あツて使へば使ふほど手徹するの意、埋もれたる才氣を惜しむの意、あらはれたる面相風采その他の萬事を愛するの意、たゞ何となく憎からぬ意、自から呵しき節の多き意味、經歴を聞いて憫れむの意、前途を思うて

捨てかねるの意味、すべて善惡美醜賢不肖、さては事の利害と物の消長と時の盛衰に依ツて同じからねど、そもや岡田重正が健次に對するの眞意は以上いづれにあるべきぞ、此ごろは出るにも入るにも彼を彼をと身に引付けて幼少より育て上げたる恩顧の寵臣に似たりける、

今夜も徒然のまゝ主人の重正たゞ獨り健次を自己が居室に呼び入れて、滿面の笑と眞の煙を取交ぜながらの物語、

「どうだ汝、隨分このごろは草臥れて來たらう、最初のうちと違ツて、だン〳〵日が經つに從ツて、根が書生した身體だもの」

「ありがたう御坐います、しかし日の經つに從ツて馴れて來ますから、却ツて身體の方は樂になりましたが、心の方は」

「心の方はどうしたね」

黑田健次

「あせるまい、あせるまいとは思ひますが、偖この心といふ奴、をり〳〵胸先へ不意の難題を持ち上げますから甚だ困却いたします」

「むゝその心が、どンな難題を持ち上げるね」

「むしか熊谷が陣鐘の音に耳おどろかして念佛の鉦を叩き割ツたとやらの世諺、我みづから我を

責めて元來のいろはに立歸ッた決心は致して居りますものゝ、寢覺め勝の夜な夜な枕頭に惡魔めが這ひ來ッて私語く言葉に、起てよ健次、おきよ健次、汝いつまで土龍と一般この下界の土を被るぞ、世は一足飛びの雲の上、世は一足飛びの雲の上と、夢うつゝ耳の底に殘ッた曉は流石に何となく、春や昔の春ならぬ地心に」

「はゝゝゝゝ野心勃々たるの體だな、しかし、その野心は、むしろ其人を大にするの意味だからね」

「ところが、その野心むしろ其人を小にして元の李阿彌となッたる私、とかく凡俗は凡俗で、たゞこの凡俗、あはれ蟻螻の這ふが如く身分相應に進みたいがための一心專念を期して居ります」

「なるほど、ぢやアまづ當分もう一箇月ほど其まゞで辛抱しろ、今に何か考へてやるから、しかし案外の難關に投じるかも知れないよ、いゝか、其場に至ッて逃げ出すやうな事はあるまいね」

「生命は無事で御坐いませうな」

「昔と違ッて今の世の中だよ、生命に關るほどの事ぢやアないから」

「一命こゝに無事ならば、よしや如何なる難關でも、結構、望むところ、宜しう御坐いますとも、事もなく物の始まらないうちから兩肱を張ッて身命を賭するなンど、さやうな慌てた嘘は車し上げませン代りにやア、殆ど身命を賭する間際までは鼻唄で遣ッて退けませう、はゝゝゝゝ前以て御斷り申しますが、實際生命となッた曉は遠慮なく逃げ出しますから、此邊かねて御承知を」

「おもしろい〳〵身命を賭する間際までとは面白い、實際いのちの捨て場には逃げ出すとの前口上いよ〳〵面白い、充分遣らすから飽くまで遣ッて見ろ」

兎も角も一月ばかりは其まゝに居よ、きれるか斬れぬか汝が懷中の匕首を一見せん、されどまづ難關に投じて刃の利鈍を試せし上の事それ承知かと、威嚇すが如く氣遣ふが如く頭上より呑んでかゝりし主人の言葉に、健次おもはず臍の邊りを皺寄せて皮一枚の腹の中に笑を含みつゝ、難關といふ難關そもや如何なる難關ぞ、世上なみ〳〵の奴が眼の舞ふ難關ならば我に於て朝飯前に箸とる同然、もしまこと我を驅ッて深みに落すほどの難關ならば世上なみ〳〵の人にあるべき理なし、あらば其人の魂魄まづ消し飛んで血迷ふべき筈、ふゝン何のこッたい、手に取れば幽靈の正體見たり枯尾花の類ならんと、例の横筋違に突ッ跳ねたる不敵の素根性いよ〳〵募れども、たゞて顏色には出さず其まゝの走り小使、

主人の重正が妻女に祕して妾宅へ約束の坐蒲團五枚あの呉服屋より受取ッて其まゝに持ち込めと
の内命はッと健次の役、さらに好ましからねど、不思議に再會のお島が居所、おもひも寄らぬお
島が顏を二度見る辛さ悲しさ嬉しさを取交ぜて喜憂こもゝ〳〵身を包む今のあはれに驅られつゝ、
大風呂敷を脊負うての我姿、また更に彼が涙を增すの種かや、

「御免下さい、御免下さい、おたのみ申します」

聲は正しく良人と、はや涙ぐんで立出づるお島、ものをも言はず脊負ひし大風呂敷に手をかくれ
ば健次も無言に腰うちかけて、互に見合はす顏と顏との一刹那を誰に語らん、

「よく良人まア、こりやア何ですか、さぞ重かッたでせうに、ちよいと良人や、お上りなさいな
幸ひ今、お不在ですから、いろ〳〵と談したい事、また聞きたい事も」

「むゝ小指は不在か、外に誰も、和女ひとりかね」

「外には猫一頭、お飯炊は湯のお供に出ましたから」

「萬事御注文通りだね、時に和女どうして此家へ、全體なンだ、下女か、食客か」

「妾より良人まア、いくら何だッて、なぜ、そンな淺ましい事をなさるンですよ、過日、ふいと
お目にかゝッてからといふものは碌に夜も寢ないで、あンまりぢやアありませんか、馬鹿々々し

い、氣でも違はなけやア良人として出來ぬこと、死ンでもさ」

「いや、その不審は道理だがね、別に深い仔細ありだ、決して心配するな、かう落ちても心は元
のまゝの乃公だ、まだ腸は枯れ切らないから、しかしお島、世の中といふもなアつまらないも
ンだな、今更ら愚癡を滾す理もないが、第一この風姿となッちやア、この樣に扱はれて自分も其
つもりよはゝゝゝゝゝ都々逸にある通り、韓信が股をくゞるも浮世と時節さ、踏まれた草にも花
の咲くを待ッて居な、根は腐らない、たしかに土の中の種は其まゝだから」

腐れ緣といはゞいふべく惡緣といはゞいふべき筈ながら、腐れ緣なればこそ惡緣なればこそ浮世
の果の底に落ちても互に離れがたく、こゝぞ眞に情と戀の只中、その只中をまた行き過ぎての後
は情も戀も飛び越えて、心中と壁一重の悲しさ辛さ痛はしの果となりつゝ、餘所には知られぬ心
と心の一塊。身は別れて暫し尾上を隔つとも、

良人は妻を、妻は良人を、いづこ如何なる世に落ちてあらんかと片時わするゝ隙もなかりしに、
おもひきや互に同じ下男となり下女となりつゝ、しかも主と主との通ひ路たえぬ家毎に涙の種を
作らんとは、神の業か思ふ心の通じてか、

健次が風呂敷づつみを脊負うて來りし時は、幸ひ女主の不在とお島うれしく懷しく、たとへ豪所

の片隅へなりとも引き上げて別れし後の憂きかず〳〵問ひもし問はれもしたく、せめては熱き茶なりと飲ませたく、悲しければ前夜の酒の残りもあること、神も佛も見許し給へ主の物ぬすむ心にあらず、そッと燗して湯呑に三四盃さぞや其後あれほど好きなもの雫も叶ふまじと、涙片手に焦心る折しも生憎に歸り來る跫音の辛や悲しや、健次もまた思ふこと口にいはれぬ今の身なればとや、あはれ懐中より一封の手紙、無言にお島が袂へ差入れて立歸りぬ、

其日の用も果て其夜の時も更けて、お島おのが部屋の片隅に身を潜めながら、わざと豆ランプの火を細めて取出す良人の書を、妻の身として人目を忍ぶ淺ましさ、しかも立ちながら壁に向うて鉛筆の走り書、なほさら哀れなり、

互に今の身となりては別にいふべきことなし、たゞ我身を痛はしなどゝ思ふあまりに主人が氣に入る女の氣に取入りて、なまなかの貞女立は斯る時なほさら無用々々、いづこまでも知らぬものとして暫しの間の辛抱たのみ入る、かけてよいのは衣桁に小袖かけて悪いは薄なさけといふ諺ゆめゆめ忘るべからず、たゞ其身を大切に煩はぬ心がけ第一のこと

あら〳〵かしこ

お島いくたびか繰り返し繰り返へして湧き出づる涙を袖に包みかねつゝ、あれほどの氣性の良人を今あの境涯に落せしも、元を糺せば甲斐なき女の我身に悪縁つなぎ給ひし故、さるを悪口毒口たえまなきあの口癖より露いさゝかの怨みがましき事もなく、たゞ身を大切に煩ふなとは、海山はる〳〵越えて互に逢はれぬ情の書よりも、いつ鼻の前に顔見合はせて人目しのぶの物も言はれぬ情の書こそ、あはれも深く心も悲しきお島が今の境涯、夜ふけ人定まりて涙の拾ひ讀み、たれ知るまじと思ひしに、女主が厠への戻りがけ襖もる火影に心付いて、そッと際見せし其の翌の朝、

「あのウ和女、前夜は何をして居たの、あンなに遅くまで」

不意に問ひ掛けられてお島はッと思ひながら、

「いゝえ、何も致して居りませン、貴女が御寢みになると、すぐ妾も御免を蒙りまして」

「おや、さう、しかし一時過ぎに何か手紙を見て居たぢやアないか、晝間見れば宜いものをほゝゝどうせお安くない筋だらうに、なアに構はないよ、妾だッて根からの野暮でもないさ、お話

しよ、隨分ことによると加勢ぐらゐするからね、誰も覺えのあることさ、全體、和女が始めて慶庵から來た時、先刻承知、すぐ見拔いて置いたよ、年輩といひ容貌といひ起居振舞から萬事ぬけめのない樣子、ほンとに妾風情が手で使ッちやア過ぎるよ勿體ない、しかし草の葉がくれとやらで、いづれ深い事情のあることゝ思ッて今日まで、もし事と場合に寄れば、及ばずながら力にもなッてね、妾も今かう結構に暮して居るものゝ親はなし同胞もない獨身で、おもやア隨分さびしいワね」

「はゝゝゝゝゝゝ御新造樣ッてば、あンまり貴女、身分不相應のお言葉に預ッて、どちも御挨拶の申し上げやうも御坐いませン、實は、ありやア貴女、さる處に御奉公いたして居ります時分、國の母から父親の年同に歸ッて來いと申してまゐッた手紙で、襦袢の半襟を探さうと思ッて葛籠の底から、ふいと出ましたので、つい」

「さうかい、しかし何だか怪しいもンだね、和×の容貌が容貌だから、浮世の關所は無事に通れないよ、しかも斯ンな奉公しなくッても宜いに猶更、ほゝゝゝゝ」

「御戯言を、貴女まだ御飯炊にならないのが人樣の御慈悲で御坐いますよ」

「それ、その口前だもの、誰が今まで打棄ッとくもンかね、白狀おしよ、かくさないでさ」

「どうも、困りましたこと、たゞ御覽の通りの不束女、何分この後とも御見捨てなくと申し上げるより外には、御遠慮なく御叱り遊ばして、時に旦那樣は何日いらッしやいませう」

「何時ッて極りがないのだよ、ひよッくり遣ッて來られるから、たいてい明日の夜ぐらゐだらう」

「おやさうで御坐いますか、まだ深くお言葉もいたゞきませンが、萬事おやさしくッて在らッしやいますことね、して御越しの節は必ずお供が」

「なアに供なンさア連れて入らしッた事はないに、過日ふいと、あンな男を、なンだか新參ださうだが大そう面白いッて、お氣に入りのやうだよ」

黑田健次

今日は健次を供にも連れず、主人の岡田重正ふいと妾宅に入り來りて、腰を屈ぬ哀れを催し空涙を粧ひながら、ゆきくれて旅に迷ひし半白の老爺一人、何卒お宿をたのみ入るとの戯言に、それは〳〵嘸や御難儀むさくろしけれど、先づ此方へと妾が笑顏の優しさに、花々いざとてこゝに人知れぬ小宴の春となりぬ、

重正は深くまゐらねども世にいふ機嫌酒、盃の六つ七つ傾けしころは最早八分の醉を帶びて床柱に脊を凭せながら膝を崩し身を碎いて滿面の笑、

「どうだ此ごろは、ちと面白い談話でもないかね」
「御坐いませンの、わけて近ごろは門外へ出ませンから、しかし家内に、ちよいと妙なことがありますのよ」
「むゝ家内にあるとは猶更ら面白いね、全體どンな事だ」
「どンなことッて、外でも御坐いませレが、あの島ね、先月から來て居ります仲働きの島ね、あなた彼女を何者だと思召します、隨分垢抜のした女でせう」
「さうさ、おれも最初から、ちよいと眼に止ッて」
「おや危險、危險」
「はゝゝゝゝゝ馬鹿、戯言は偖おいて和女あれを何だと思ふ、ありやア尋常の鼠ぢやアあンめエよだ、ねエ」
「ですとも、きッと素人ぢやア御坐いませンわ、しかし藝妓あがりとしては、また、どッか謹直すぎるところもあッて、何だか變ですよ、過日も夜の一時ごろ手紙のやうなものを讀ンで泣いて居ました樣子から考へると、いづれ情夫ゆゑに落ちた身の果と思はれますワ」
「なるほど、さうかも知れないなア、おれが來る時の出迎へ鹽梅から歸る時の送り工合なぞなか

〳〵人馴れたところがあるよ、そして第一に氣が利いてるからね、萬事が惜しいもンだ、飾りッけなしの談話を聞いたら隨分おもしろからうよ、はゝゝゝゝゝゝ妙だわい、和女の家には彼な女が來るしまた乃公の手許へは彼な男が來るし」
「ほンとですことね、時に今日は彼男をお連れなさらないで」
「むゝ面白い奴だから連れて來ようと思ッたが、あンまり度々おれの穴に出這入さすも不可ないから、全體和女のやうな浮氣者には危險だからな」
「おや憚りさま早速の御返禮を、ほゝゝゝゝゝ」
「ところで如何だね、こゝの島と彼男とを一諸にして、互に隱してる身上談話をさせたら、をかしいぜ、うまく白狀のさせやうは無いもンかね」
「さうですねエ、そりやア面白いこッてせうよ、工風は御坐いませンが、妾は妾で、も一度あの島を責めて見ますから、あなたの方は彼の男を、そして二人ならべて置いてね」
「むゝ一工風して見よう」

十餘年も書生した曉に岩疊の身を壯士の群にも落さず、わざと我から甘んじての下司奉行は一

物いづれ仔細のある奴、しかも尋常の書生あがりと萬事ゆく道の違うたる面魂、まづその本音を吐かすの前、難關に投じて切味の利鈍を試さんとの主人が心を、はやくも見て取ツたる健次かしこし得たり難關といふ難關いつにても來れかし、一番おもしろ呵しく遣ツて退けんと待ち受けしより凡そ十日目の夜、めされて主人の居室に入れば、重正じッと今更に健次が顏を見詰めて、

「おい、どうだね、外でもないが、いつまでさうして、居ても詰らないだらうから、いよ〳〵遣ッて見るかな」

「はい、何をで御坐います」

「いつか汝が乃公に賴み乃公が汝に言ッた事さ、つまり今の氣樂な骨折を止めて少々こむづかしい頭腦で働く仕事さ、有形か無形か、どうせ當分のうち苦勞は免れないからな、人の志を立つるまでは」

「ありがたう御坐います、艱難辛苦は無論覺悟の前、いかやうな事に出逢ッても隨分やッて退ける決心では居りますものゝ、さて人事を盡して叶はぬものは運命、精力を盡して及ばぬものは性來賢愚の差別で、はゝゝゝゝゝ私風情の力で持ち堪へられます事ならば、まづ遣らして見ようかと思召す邊までの事ならば」

「なるほど、しかし免も角も遣ッて見るさ、いや出來るだらうよ汝の腕ぢやア」

「これは恐れ入りました、私の腕ッて、いまだこの痩せ腕を御覽に入れた事もないうちから、さう仰せられては却ッて怯れが出ますやうで」

「はゝゝゝゝゝなアに、それほどの難事でもないから、汝の腕次第に充分やッて見ろ」

「はい、ところで先づ御用の筋は」

「そりやア今こゝで言ふに及ばないから、あすの朝、汝が出がけに委しく話さう、時に其衣服では不可ンよ、妻女に言ッて羽織と袴を貰ふが宜い、過日から出來てる筈だからね、忽ち一夜にして下男と紳士の早變り、用が濟み次第、もとの情婦の所へでも寄ッて來るが宜いさ、はゝゝゝゝ言はなくッても其くらゐの事はするだらうよ、ねエ」

黑田健次

およそ人を難關に使ふほどならば、まづ其の難關の順序始末を仔細に打明けて、これに處する萬事の意見をも聞き取り、また是に關する方針手段をも注意しつゝ、許すかぎり工風せよとの時間を與ふべきが世の常なるに、一言かッて其事に及ばず、あすの出掛けに突然かたらんとの主人が心中そもや我を何とか見たる、しかも數日前より我ために用意の羽織と袴いよ〳〵以て訝かしと、流石の健次おのが部屋に兩腕くンでの思案顏、まてよ、こいつ聊か變だわい、

當世五人男上篇——（終り）——

昭和十五年五月五日印刷
昭和十五年五月十日發行

定價金壹圓五拾錢

著作者　村上信

發行者　東京市日本橋區通三丁目五番地　飯島竹次郎

印刷者　東京市神田區神保町三ノ廿三　小林美三

三美堂印刷所印行

不許複製

當世五人男
【上篇】

發兌元　東京市日本橋區通三丁目五番地　電話日本橋六八四・振替東京四五五四番　明文館書店

最新刊・大好評

黒岩涙香先生譯

巖窟王 上卷	定價金壹圓卅錢 送料金十錢	
同 下卷	定價金壹圓卅錢 送料金十錢	
噫無情	定價金壹圓卅錢 送料金十錢	
鐵假面	定價金壹圓卅錢 送料金十錢	
幽靈塔	定價金壹圓卅錢 送料金十錢	

村山浪六先生著

八軒長屋 前篇	定價壹圓卅錢 送料金十錢	
八軒長屋 後篇	定價壹圓卅錢 送料金十錢	
馬鹿野郎と稻田一作	定價壹圓卅錢 送料金十錢	
人間味	定價壹圓卅錢 送料金十錢	
當世人男 上篇 中篇 下篇 各	定價壹圓五拾錢 送料金十錢	

發行元 東京市日本橋區通三ノ五 振替東京四五四五番 電話(24)〇・六八四番 明文館書店

398
444

終